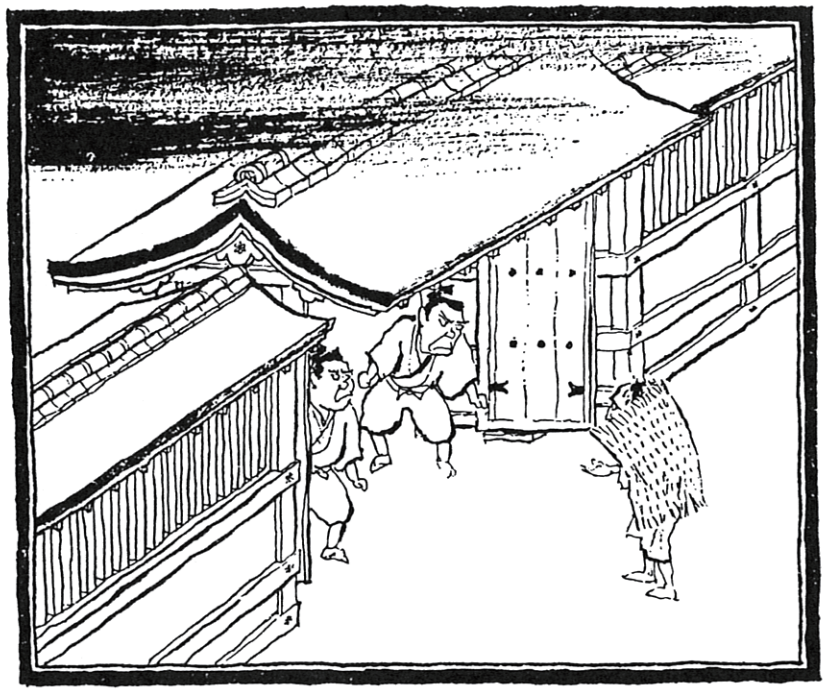


一休禅師が紫野（むらさきの）の大徳寺に住持していたときのこと、或る日、若い男が寺の玄関にやって来て、

「私は京都の高井戸と申す長者の使いの者ですが、来月大旦那さまの一周忌にあたりますので、ぜひ禅師さまにおいでをねがいたいのです。高井戸と申せばすぐわかります」

と、さももったいぶってたのむのだった。

取次ぎの僧がその旨を伝えると、一休禅師は、金持が金の力を借りて横柄な態度をとることを日ごろニガニガしく思っていたので、何か心に期するところがあったのだろう、日時を確かめて参上する旨を返事させた。

秋の日は短く、やがてその日もたそ

がれ、夕やみがただよう高井戸家のいかめしい玄関さきに、一人のみすぼらしい乞食がやって来た。うすよごれたボロをまとい、泥だらけのこもをかむり、

「どうぞ、おめぐみを……」

と、いかにもあわれげな声を出し、両手をもみながら物を乞うのであった。が、高井戸家の下男たちは、

「うるさい。かえれ、かえれ」

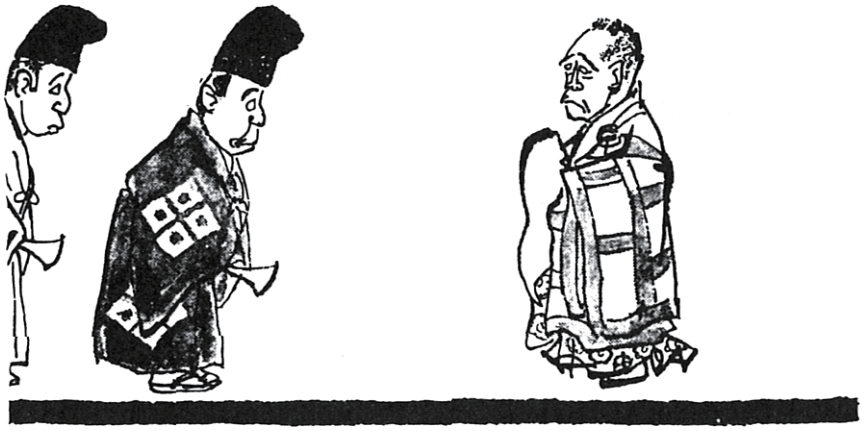
と、みんな、寄ってたかって突き出そうとした。それでも乞食はなおも、

「お慈悲でございます」

と哀願をくりかえした。

「何もやるものはないわい。とっとと消えうせろ！」

玄関さきでのこの騒ぎを聞きつけた若主人が出て来て、
「おい、乞食を早く追い出してしまえ。出てゆかねばたたき出せ！」
と、下男に命じた。
かわいそうに乞食はたたかれ蹴られ、さんざんな目にあった挙句、往来に突きたおされてしまった。
乞食は起きあがり、痛む足腰をさすりさすり夕やみの中をとぼとぼ歩き、やがて大徳寺の門をくぐった。明るい灯のもとに立ってニタリとほくそえむその顔を見れば、誰あろう、それは一休禅師その人であった。
翌る日、一休禅師は目のさめるような法衣と金襴の袈裟をまとい、約束の時刻に駕籠で高井戸家に向かった。
高井戸家の門の内外はきれいに掃ききよめられ、生き仏さまをおがまんものと大勢の人々が集まっていた。主人はじめ一族郎党は紋服をつけ、威儀を正して禅師を迎えるのであった。
一休禅師は、主人に導かれて門内に入った。
「禅師さま。どうぞ仏間にお越し下さいませ」
主人が丁寧におじぎをすると、一休禅師は、
「いや、わしはここで十分じゃ」といって動かない。
「それは何事でございます。どうぞ、どうぞ、おあがり下さいませ」



「いや、ここで結構。このむしろの上が一休には身分相応なのじゃ」
と、その場に敷いてあったむしろの上に腰をおろし、何といっても動こうとしない。
主人はいらだち、一休禅師の手をとって引き立てようとする。一休禅師はその手を払い、
「それではこの金襴の袈裟や法衣を仏間に持っていっていただきたい。わしの体は有難いものでもなんでもないから、このむしろの上で結構じゃ」
といって皮肉そうな笑いを浮べ、
「ご主人、実は昨日の乞食も今日のこのわしも同じ人間じゃ。昨日はたたかれ蹴られ、今日は迎えられて手厚くもてなされるが、一体これはどうしたわけか。このお袈裟が光るからではないのか」
といってカラカラと大笑いされた。
これを聞いた主人はじめ一同のものは肝をつぶしておどろいた。

時の将軍はじめ多くの大名から尊敬されている一休禅師に対し、昨日の無礼を思うと、もはや言葉も出ず、顔も青ざめてふるえるばかりだった。

一休禅師はにっこり笑いながら自分の着ている袈裟や法衣をそこに脱ぎ、「この法衣や袈裟にたのみなさるがいい」といっていつもの通り、何の屈託もなく立ち去ったという。

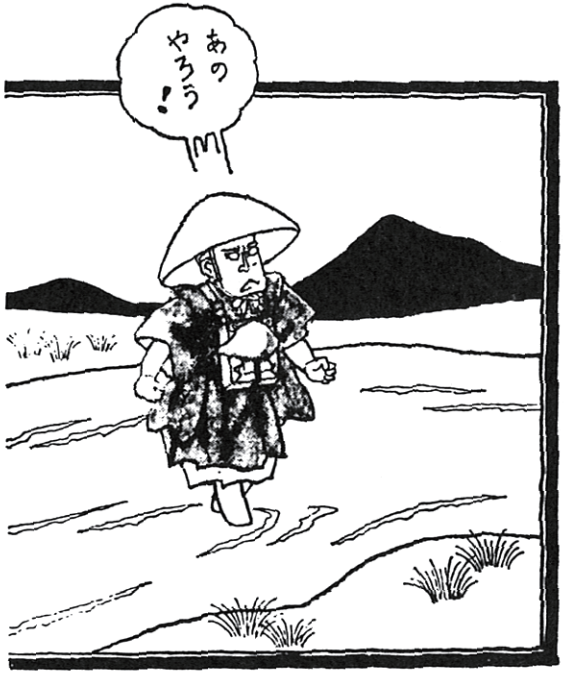
まだ抱いていたのか

原坦山（はらたんざん）といえば明治時代の有名な禅僧であり、また、東京帝国大学（いまの東京大学）に開設されたインド哲学の初代講師、学士院会員に選出された仏教学者でもある。明治二十五年（一八九二年）、七十四歳でこの世を去ったが、死期を事前に予知し、瞑目二十分前、知己朋友にハガキを出し、

「拙者即刻臨終仕（つかま）り候。この段御通知に及び候」

と報じ、従容（しょうよう）として坐定（ざじょう）したという話は有名だが、若いころから異彩を放っていた。

行雲流水（こううんりゅうすい）の旅に出ていた若いころ、同参



(同期生)の親しい友と田圃道を歩いていたら、小川に出くわした。川幅はひろくもなく、水も深くはないが、橋がないので徒渉するほかない。

ふとみると、妙齢の乙女が川を渡りかねて困っている様子。

坦山は、

「どれ、拙僧が渡してあげよう。さァ、しっかりわしの肩につかまりなさい。いいかね」

と、いいながら、軽々と娘を抱きあげて川を渡してやった。

娘がまっかな顔をしながらお礼をいうのにも耳をかさず、さっさと立ち去って道友のあとを追った。

やがて半里(二キロ)も来たころ、それまでふきげんそうに黙々として歩いていた道友が、どうにもがまんならんという風に、ぶっきらぼうに言った。

「お前は実にけしからん。出家の身として、若い女を抱くという法があるか！」

えらいけんまくである。

坦山は、とぼけた顔をして、あたりを見まわし、

「なに、女、どこにいるんだ」

「とぼけるナ。さっき、きれいな娘を抱いたじゃないか」

「ワッハッハ……なんだ、あの女のことか。おれは川を渡して、おろしたよ。お前はあれからずーっと、まだ抱いていたのか」

これにはさすがの道友も二の句がつげなかった。

シャッターを切れば必ずフィルムを捲きあげるのが撮影の常道。捲きあげないと二重写しになるからである。時々刻々に移り変る周囲の動きに応じ、心のフィルムの捲きあげを忘れてはならない。

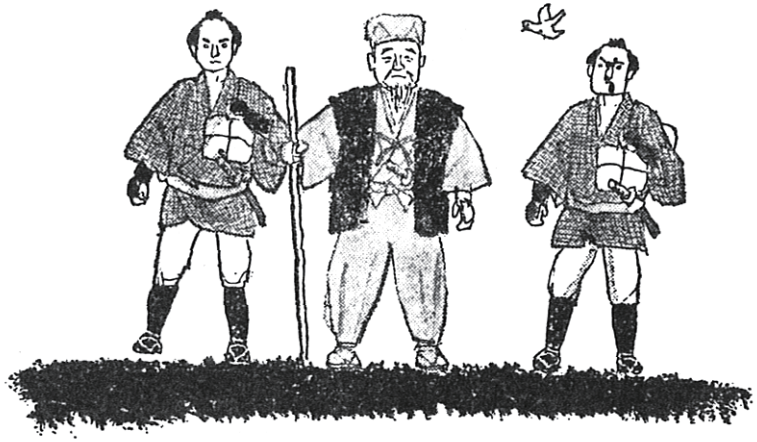
棒喝は禅家の常

水戸光圀（みつくに）といえば天下の副将軍、権勢並びなき雲の上の人だが、助さん格さんを伴って諸国を漫遊し、虎の威を借る狐どもに鉄槌を下す水戸黄門は庶民の味方として今なお人気の的である。

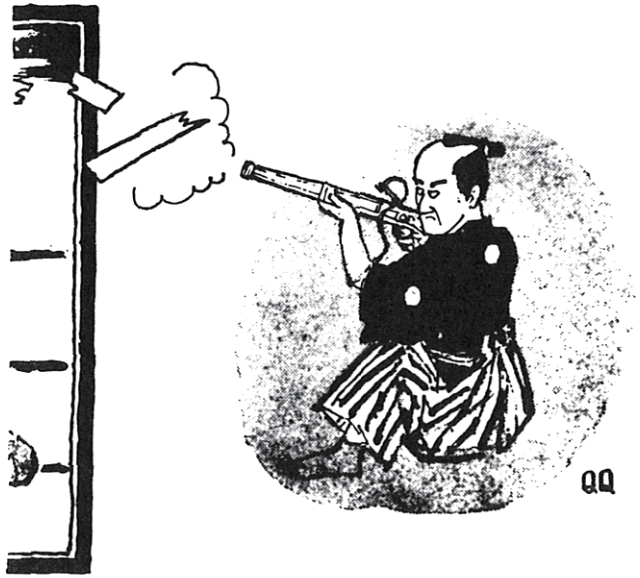
この光圀の心を育てた人に心越禅師がある。

心越禅師は中国の人。明朝の滅亡に際し長崎に渡来した。傑物であることを伝え聞いた光圀は禅師を江戸に呼び寄せ、さらに水戸に招いて名刹（めいさつ）祇園寺に住まわせた。

光圀は、心越禅師を時折招いては法談に耳を傾けていたが、或る日のこと、光圀は禅師の胆力を試してみようと思い、饗応し、歓談久しうしてやがて大盃をす



すめ、これに酒をなみなみとつがせ、
「いざ禅師、召し上れ」
と、言った。禅師は、
「ありがとうございます」



と、酒を口にしようとした刹那、かねてその意を含ませて次の間にひそませておいた家臣に鉄砲を一発ズドーンと放たせた。
光圀はジッと見つめていたが、おどろくかと思いのほか、心越禅師は神色自若として一滴もこぼさず呑みほしてしまった。
光圀が、
「禅師、ただいまは失礼つかまつった」
とわびると、禅師は平常となんらかわりなく、
「鉄砲は武門の常じゃ、ご配慮ご無用でござる」
と答えて返盃した。光圀が、禅師から盃を

受けて酒をつがせ、いままさに呑もうとしたそのとき、禅師は、
「喝！」
と大声疾呼した。百雷が一時にとどろき落ちたかと思われる禅師の大喝一声に、光圀の手は思わずふるえ、傾いた盃からは酒がこぼれた。
光圀色をなし、
「何をなさる！」
と詰問するようにいうと、禅師は、
「棒喝は禅家の常でございます」
とさりげなくいったという。
日ごろ心越禅師の言葉少なく、控え目な姿を見ていた光圀は、どれほどのものかを計画して試したのだったが、あべこべに見事に試されてしまった。

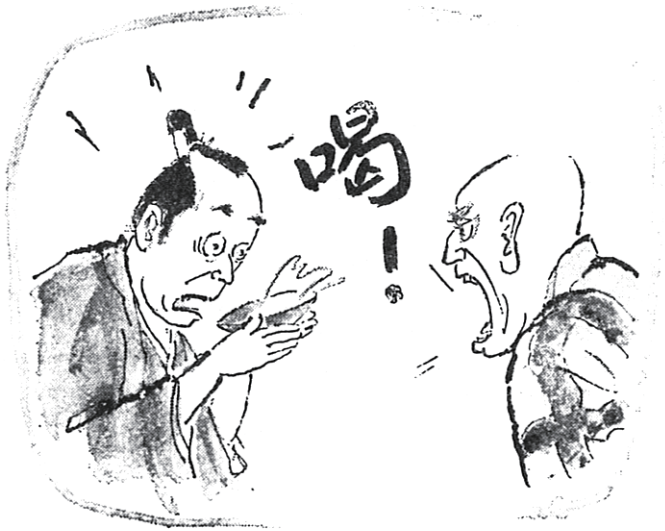
禅のはなし　①

令和３年７月４日（日曜日）月次祭　　こうとくにんげん塾 #286

出典：現代教養文庫・禅のはなし（佐藤俊明・著、社会思想社）

※本書は昭和 52 年６月『二つの月』のタイトルで刊行された。

※佐藤俊明（さとう しゅんみょう）＝1916 年山形県生まれ、駒澤大学文学部仏教学科を卒業後、曹洞宗大本山総持寺出版部長・布教師会事務局長・副監院を歴任。1985 年から千葉県龍光寺住職。



覚悟のうえのことなら大抵のことにも動じないものだが、だしぬけの出来事に出会（でくわ）すとわれを忘れてうろたえるものである。今日も明日もあさっても、予告のない一日であり、予測をゆるさない日々である。したがって何事に処するにも覚悟が必要であり、その覚悟があってはじめて何事にも動じない胆力がすわるのである。

今　後　の　予　定

月次祭　　７月１８日（日曜日）　正　午

月次祭　　８月　１日（日曜日）　正　午

★鴻徳神社・五穀さま通信（月２回配信・無料）★

ホームページより登録して下さい。

https://kotoku-jinja.jp/mm